# 言語変化の変数としての言語教育政策
## —ポスト・クレオール連続体から二言語変種併存へ—

# 'Language and Education' Policy as a Variable of Language change : Post-creole continuum to diglossia

大原　始子
OHARA　Motoko

キーワード：言語変化，言語教育政策，ポスト・クレオール連続体，二言語変種併存，シンガポール

Key words : language change, 'language and education' policy, post-creole continuum, diglossia, Singapore,

Abstract

While changes in the political, educational and linguistic aspects of life in Singapore have been well studied by specialists, there is the need to study on the interrelated view in developments of 'language and education' policies and languages. This paper will provide a description and analysis of two historic changes in Singapore. One change is seen in the formulation and implementation of Singapore's 'language and education' policies over the four decades since the 1960s. The other is in the dynamics of English varieties in Singapore. We notice that the social distribution of English varieties has changed fairly rapidly and widely during a relatively short period: from the situation similar to a 'post-creole continuum' to the present 'diglossic' one. The principal focus of this paper will be on the ways in which English in Singapore has evolved and changed since the 1960s and on how this can be accounted for, along with changes in 'language and education' policies with a special focus on English.

## 1.　はじめに

近年、言語政策の研究が言語学の分野でされるようになって、言語政策が言語変化に与える影響が大きいと認識されるようになった。これまでの研究では、言語政策を「言語変化の一つの尺度」として定義（Haugen, 1966）したり、言語政策は「計画的言語変化」である(Rubin and Jurnudd, 1971）とした他に、無意識下に進行する言語変化と、使用者の評価や言語使用に影響を及ぼす言語政策と関係する言語変化の異なりに言及した研究(Ferguson, 1977)が知られるが、実証的研究は少なく、言語政策研究と言語変化の研究は個別にされることが多い。そこで、本稿では、シンガポールで独立当時から現在に至るまで40年の間に、言語変種の分布の構造に大きな変化(以下、言語変化とする)があったことに着目し、言語教育政策の移り変わりを合わせ見ながら、その相互関係を検証してみる。

## 2.　シンガポールの言語と変種

1960 年代、独立前のシンガポールと隣国のマレーシアで使用されている英語の特徴に差はなかったといわれる。民族構成から見ても、東南アジア英語変種へと発達していくのではないかと見られていた。しかし、マレーシアの英語が現在でも1960 年代当時の英語の特徴[1)]を持つ(Gill, 2002)のに対して、シンガポールの現在の英語の特徴は当時と大きく異なる。シンガポールでは独立時に英語が公用語のひとつとして選ばれ、その後の言語教育政策が、シンガポールの英語の構造に影響を与えてきたからであると一般に言われるが、検証してみることにする。

シンガポールは、公用語になっている、英語、マンダリン、マレー語、タミル語以外にも多くの言語が使われ、それぞれの言語に多様な変種が存在することから、簡略化した言い方で「多言語多変種社会」ということができる。シンガポールの場合、変種というのは、地域変種ではなく、様々な社会変種である。「地域変種(地域方言)の形成の過程を経た社会よりも、社会変種の多い社会の方が理解に関わる幅が大きい(Platt, 1980)」といわれる。分かりやすくいうと、階層、教育、民族、性、世代などの社会変種が多く存在すると、様々な差異が絡み合い容易に相互理解に結びつかないということである。

このようなことば社会の言語、変種の様相は、個人と社会のレベルで捉えること

ができるが、本稿では、言語教育政策の流れと合わせて見ていくので、話者がどのような社会的場面(領域)でどの言語、変種を選ぶのかという社会言語学的に静的な視点で、社会における言語、変種の分布を追っていく。

## 3. 言語教育政策の推移

シンガポールの言語政策は、言語教育政策、キャンペーンなど様々な形で展開されている。本節では、まず言語教育政策の流れを概観する。図1は、政治体制と言語教育政策・計画の流れを簡単に示したものである。3.1 から、言語教育政策の転換期ごとに英語教育の内容によって筆者が下位分類して、その特徴を簡単に述べていくことにする。

| 政治体制 | 年代 | 言語教育政策・計画 |
|---|---|---|
| 英国直轄植民地 | | |
| 英連邦内自治州 | 1959 | 第1次教育5ヵ年計画 |
| マレーシア連邦の一州 | 1963 | |
| 独立国家 | 1965 | 第2次5ヵ年計画 |
| | 1980 | 能力別言語教育 |
| | 1985 | 一部手直し |
| | 1999 | 'Speak Good English Movement' |
| | 2004 | Chinese Language Curriculum and Pedagogy Review Committee 設立 |

第1図
言語教育政策・計画の変遷

### 3.1 イギリス統治時代の教育 (〜1959)

一部の特権階級が英語教育を受け、国民の大多数は母語教育(中華系は、この場合マンダリン教育となる)を受けた。英語を教育媒介語とする学校を設立する一方で、徐々にではあるが、マンダリンを教育媒介語とする学校が設立され始めた。つまり、植民地教育政策により、植民地支配に必要な人材を生み出すための英語教育が中華

系移民に行なわれるのと平行して、特に植民地統治とは関係ない形で、中華系がマンダリン教育を必要としていったようである。マンダリン教育を必要とした理由に、まとまりを見せなかった中国の各方言グループを特定の優勢方言ではなく、マンダリンでまとめることが最善の方法であるという方向に向いていたことと、この当時シンガポールにおけるマジョリティとしての「中国人」という意識が強く、中華系のナショナリズムの高揚を目的としていたことがある。この頃の中華系社会では、英語教育を受け西欧指向の者とマンダリン教育を受け中国本土指向の者との二分化がみられた。

### 3.2　二言語教育時代　(1959～1980)

#### 3.2.1　英語教育萌芽期　(1959～1965)

1959年に英連邦内の自治州となった時に、第一次5ヵ年計画という基本的な言語教育政策が打ち出された。これは、マンダリン、マレー語、タミル語、英語による教育の平等な機会(教授言語の選択の自由)を与えるという内容であった。英語教育萌芽期と位置づけたのは、第一次5ヵ年計画で、はじめて国家の構成民族の母語ではない英語が組み入れられたからである。

#### 3.2.2　英語教育重視への過渡期　(1965～1970)

1965年の独立後、二言語教育が正式に教育政策として実施された。第二言語の学習は、1960年に小学校で必修となっていたが、第二次5ヵ年計画では、中学校でも英語が必修となり、非英校でも理数系科目での使用言語を英語とした。ここで言う二言語とは、英語と母語のことであるが、中華系にとっての母語の定義が曖昧で、便宜上母語はマンダリンとされた。しかし、マンダリンを母語とする人は少なく、実際には方言が母語であり、マンダリンは英語に次ぐ第二の外国語、第三の言語であったため、学習の負担が大きく、この頃英語もマンダリンも話せない人が多く現れ問題となった。

このような状況下で、あえて政府が二言語政策を推進した理由は、英語が西欧の先進技術や知識を得るために有利な言語であること、そして英語の使用拡大によって、民族間の融合と安定した社会の形成を目指そうとしたことにあり、この時期、英語習得の意味がより明確になったともいえる。

#### 3.2.3　英語重視期　(1970～1980)

1970年代に入り、小学校、中学校での教育使用言語の英語化が進んだ。象徴的な例として、マンダリン教育の最高学府で中国文化の継承を建学の理念とする南洋大

学における教授言語の英語化(英校出身学生の割合が増加)があげられる。結果的に、英語系のシンガポール大学への糾合計画を政策として実施することになる。この時点で、二言語計画が当初の政策とは大きく異なり、実質上は英語の国家語化を目指すものへと変化し始めたことがうかがえる。

### 3.3 能力別言語教育 (1980〜)

1980年に、従来の教育制度の全面的見直しを図り、能力によって学習コースが決定していく教育体系が導入された。英語もマンダリンも習得が不十分で方言しか話せない成人の増加が社会問題化し、二言語政策の継続と拡大を図るために、子供の言語教育を取り巻く環境、言語運用能力を配慮した立場で講じた制度である。以降、若干の手直しが加えられているが、学生は言語テストの高度化、勉強時間の多さ、教育費用の増大などの問題、教師は労働時間の過多といった問題を抱える。

### 3.4 言語使用に関する政府のキャンペーン

これらの教育制度の変遷があった間、政府によって、言語使用に関する政策がいくつか実施された。'Speak Mandarin Campaign(スピーク・マンダリン・キャンペーン、華語奨励運動)'が、華人系の共通語としての認識と公用語の言語運用能力の向上のために展開された。そして、1999年の独立記念日の演説に、'Speak good English Movement(スピーク・グッド・イングリッシュ・ムーブメント、標準英語推進運動)'が盛り込まれた。非文法的で、訛りがある英語(ゴー前首相が用いた表現)、すなわち中国語方言、タミル語、マレー語の影響がある英語の使用をやめて、標準的な英語を使用することを推進する運動である。他方で、2004年の独立記念日の演説では、リー・シェンロン(Lee Hsien Loong)新首相によって、「中国語」の学習強化が示され、中国語学習の準備委員会が設立される新しい動きがある(5.参照)。

## 4. シンガポールにおける英語の変化

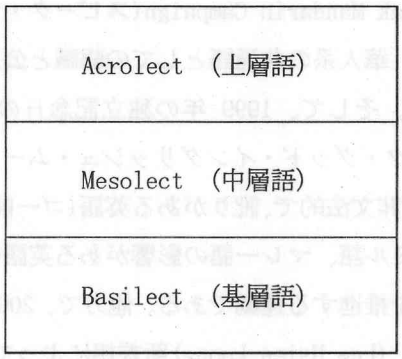
多言語が使用される中で、英語が人々の「新母語」となりつつあるシンガポールについては多くの関心が寄せられ、これまでに言語間の地位関係や、英語変種の構造などについて内外で多くの研究報告がなされてきた。シンガポールで英語が話されていることは日本でも当然のこととして受け取られるようになっているが、独立以来わずか40年の間に、経済、社会動態、教育制度の急激な変化の中にあって、言語も激しい変化をしてきたのである。以下、独立時から順に、言語変種の分布状況

をモデル化して追っていく。

### 4.1 ポスト・クレオール連続体(脱クレオール連続体)

シンガポールの英語の変種の状況についてよく知られる研究のひとつに、テイ(Tay, 1979)の研究がある。テイはビッカートン(Bickerton, 1973)の研究に習い、シンガポールにおける英語変種の様相が分離するものではないとし、ジャマイカ、ハワイと同様の「ポスト・クレオール連続体(post-creole continuum)」に例えて説明した。アクロレクト(acrolect, 上層語)という、人々が規範とする言語の標準変種(この場合イギリス英語の標準変種)に最も近い変種から、その対極にあるバジレクト(basilect, 基層語)という、アクロレクト話者には理解ができない民族の母語に最も近い変種まで、メソレクト(mesolect, 中層語)が間を繋ぐ状態で連続体として存在することを示した(図2)。

この頃、プラット(Platt, 1975)もシンガポールの英語を同様の連続体として捉え




第2図
ポスト・クレオールことば連続体
(Tay, 1979)

ており、当時バジレクトがクレオール的特徴を持つことに触れ、これをシングリッシュ(Singlish)として述べた。研究論文の上では最初の使用ではないだろうか。

当時のシンガポールの英語が「ポスト・クレオール連続体」であったとするには幾分問題点が残されていた。「ポスト・クレオール連続体」は、クレオール内部で、標準とする言語に向かう言語変化が起きた結果生じる、言語習得の差という話者による変種の連なりであることを特徴とする(Bickerton, 1973)。その言葉どおり、ピジン化を経たクレオールの存在を前提とするので、シンガポール英語が古典的ピジ

ン・クレオールという過程を踏んできたかどうかである。このあたりの検証がされなければ、英語を母語としない社会での英語使用はすべて「ポスト・クレオール連続体」に例えられる危険性をはらむであろう。

シンガポールには、マレー語のピジンが存在したが、英語基盤のピジンは確認されていない。この頃の英語に、他の英語基盤のクレオールと似た文法特徴があるが、英語習得の過程で生じる誤りの現象だと考えられるようになった。これは、独立前後は、3.1で述べたように、英語教育の有無、イギリス統治との関わりの度合いが、個人における英語習得の差であったからである。

後に、テイ自身が1986年の論文で、「ポスト・クレオール連続体」と呼べないとしたが、独立直後の英語変種の様相が、「ポスト・クレオール連続体的」であったことは充分示されたといえる。テイとプラットが、多くの記述によって、メソレクトとバジレクトに相当する24の特徴を体系的に明らかにしたように、1970年代までは、話者による英語変種の差異が大きかったことと、シンガポールの英語がイギリス英語と比べて劣る非標準的な変種であるという見方が強かったことをうかがい知ることができる。

### 4.2 多言語変種併存(ポリグロシア)社会

「ポスト・クレオール連続体」に身を置くそれぞれの話者は他の変種を使えない。つまり一元的な言語使用をする。たとえば、学校(公的)、家庭(非公的)の領域において、アクロレクト話者はアクロレクトのみを、バジレクト話者はバジレクトのみを使用する、つまりアクロレクトもバジレクトも異なる話者グループによって使用されるので、基本的にこれらの変種間で、コードの切り替えはない[2]という特性がある(Bickerton1973;Gupta,1991)。つまり、レジスター(使用域)の違いではなく、話者に基づくレクトの違いなのである。

しかし、徐々にシンガポールの英語の使用に、レジスターによる英語変種間の使い分けの現象が見逃せなくなった。プラット(1977)はこの点に注目し、「多言語変種併存(polyglossia, ポリグロシア)」という概念を用いて、英語変種と言語の社会的使い分けを説明した。「多言語変種併存」とは、ファーガソン (Ferguson,1957)が提唱した「二言語変種併存(diglossia, ダイグロシア)[3] 」を応用した概念である。まず、「二言語変種併存」の原則に基づいて、公的度合いの高い政治・宗教の領域で使用される高変種(high variety)、公的度合いの低い家族、親しい友人などの日常生活に関わる場で使用される低変種(low variety)、さらにその間に種々の社会関係、

領域を設定し、そこで使用される中変種(middle variety)を想定した。それぞれに中国語、マレー語、タミル語、英語の標準変種や口語変種を当てはめて、各変種内で優位に使用される変種から順位がつけられ、地位付けして示したものである。

ここで、標準英国英語とは異なる意味で初めて「シンガポール英語」[4]という概念が用いられて、それが複数の変種を内包することを認めた点で目新しい考え方であった。第二次5ヵ年計画で英語と母語の二言語教育が順調に浸透し、地域特性のある英語を認識できるようになっていたことが分かる。

図3は、英語教育を受けた中華系シンガポール人が持つスピーチレパートリー[5]を3つのレベルで示したものである。

| 地位 | コード |
|---|---|
| H1 | Formal Singapore English |
| H2 | Mandarin |
| DH1 | Standard Malay |
| DH2 | Tamil |
| M | Colloquial Singapore English |
| L1 | 福建語、広東語 |
| L2 | 他の中国語方言 |
| L3 | Bazaar Malay (Bahasa Pasar) |

第3図
英語教育を受けた中華系シンガポール人のスピーチレパートリー
(Platt, 1977)

H(high variety, 高変種)には、公用語としての地位を持つ英語、マンダリン、標準マレー語、タミル語が属する。形式ばったシンガポール英語とマンダリンは、公的度合いの高い領域で使用されるが、プラットは全体的な態度としての位置づけから最も高い位置にシンガポール英語があるとした。二言語教育とはいえ、英語教育に比重が置かれていたことがうかがえる。

高変種の中で、プラットはHの下に位置づけたDH(dummy high variety, ダミー・ハイ)という面白い概念を提案している。これは、「見せかけの高変種」というもので、一部の人々は識字力を持ち、話者、政府、メディアなどによって威信ある地位

が与えられているが、広汎に使用されない言語に適用している。シンガポールの中華系にとっての、標準マレー語、タミル語がこれにあたる。二言語ともに、公用語とされているが中華系共同体ではあまり用いられないことによる。

中国語方言間の順位に違いがあり、L(low variety, 低変種)の最も高い地位に、中国南部方言の福建語と広東語が置かれている。中華系二大グループの使用言語であるが、中華系の間で商業、取引の場で使用されるなど他の方言話者によっても習得される言語でもあり、共通語的な地位を持つからである。最も低い位置にバザール・マレー(Bazaar Malay)が置かれている。バザール・マレーとは、バハサ・パサール(Bahasa Pasar)、ムラユ・パサール(Melayu Pasar)とも呼ばれ、文字通り市場や通商の場で用いられたことばで、マレーシア、インドネシアなど沿岸部で発達したマレー語基盤のピジンである。当時、マレー人だけでなく中国人との間でも広く使われていたようであるが、ピジンであるという点で、低く地位づけされたと思われる。

このように「多言語変種併存」とは、社会的領域に関連した使用言語を重層的に探る概念であることが分かる。それまでシンガポールの言語の切り替えは、多言語使用(マルチリンガル)で語られてきたが、後にプラットは、「多言語変種併存」と「多言語使用」の二つの側面から捉える、「多言語使用を伴う多言語変種併存社会(polyglossia with multilingualism)」というモデルでシンガポールに見られる言語変種の様相を説明した。つまり、民族的、教育的背景といった話し手・聞き手の言語レパートリー[6)]からの選択と、多言語変種が存在する社会の持つスピーチレパートリーからの選択の二つの次元で複合的にシンガポールの現象を捉えるもので、画期的なものであった。それは同時に、個人レベルの英語習得の差といった状況から脱し、社会レベルで言語教育政策、特に英語の威信計画が浸透した結果、変種の地位に大きな動きが始まったことをうかがわせる。

### 4.3 多言語使用・多言語変種併存ネットワーク社会

プラットは1977年の中華系のスピーチレパートリーを説明したのに続いて、1980年にシンガポール全体の言語、変種の地位を明らかにした。図4は、シンガポール人が持つスピーチレパートリーを3つのレベルで示し、言語、変種を11に地位付けしたものである。

スピーチレパートリー(注5参照)を基にしたモデルであるので、シンガポール人がこれらすべてのレパートリーを持つ(言語、変種を話す、理解する)というわけで

はなく、ことば社会にこれらの言語、変種が存在し、機能を持って使用されていることを示した図である。

| 地位 | | コード |
|---|---|---|
| HS | | Arabic, Pali |
| H1 | ＊＊ | Formal Singapore English |
| H2 | ＊ | Formal Mandarin |
| H3 | | Formal Malay |
| | | Formal varieties of Indian languages |
| M1 | ＊＊ | Semi-formal Singapore English |
| M2 | ＊ | Semi-formal Mandarin |
| M3 | | Semi-formal Malay |
| | | Semi-formal varieties of Indian languages |
| M4 | ＊＊ | Colloquial Singapore English |
| L1 | ＊ | 福建語 |
| L2 | | 広東語、潮州語、客家語、海南語 |
| | | Colloquial Malay |
| | | Colloquial varieties of Indian languages |
| L3 | ＊＊ | Bazaar Malay (Bahasa Pasar) |

＊　方言集団間のコミュニケーションに使用
＊＊　民族集団間のコミュニケーションに使用

第４図
多言語使用・多言語変種併存ネットワークにおけるコードの地位
(Platt, 1980)

図４を見ると、高変種に、公用語に定められている言語のフォーマルな変種が属していることが分かる。公的度合いの高い領域と繋がりがある高変種の中で最も高い地位にアラビア語とパーリ語があり、HS と呼んでいる。HS とは high special variety(特別高変種)のことで、宗教領域での使用言語であるため、「二言語変種併存」の定義に従って、高い地位に置かれ重要性は認識されているが、広汎に使用されていないため、公用語になっている実質的な高変種と区別されている。

中変種には、公用語になっている言語のセミ・フォーマルな変種が、シンガポー

ル英語、マンダリン、マレー語、インド系言語の順で並べられ、最後に口語シンガポール英語が置かれている。他の公用語の中国語、マレー語、インド系言語より、英語の地位が高いことが分かる。

低変種の最も高い地位に、中華系の最大話者グループの使用言語であり、リンガ・フランカとしての機能を持つ福建語があり、それに続いて、シンガポールにおける5大中国語方言のうちの残りの4方言、広東語、潮州語、客家語、海南語が位置づけられている。そして、口語マレー語、口語インド系言語、バザール・マレー(市場マレー)と続く。バザール・マレーは中華系の高齢者にも使用が見られるように、民族集団間の共通語的要素をもつにもかかわらずその地位が低いのは、4.2 で述べたように、マレー語のピジン化したことばであるため、書記体系が成立していないことと、市場などでの小規模な取引に用いられてきたということによる。

### 4.4 二言語変種併存(ダイグロシア)的様相

ここまで紹介してきた、「ポスト・クレオール連続体」や、「多言語変種併存」で示す研究は、非常に興味深いものであるが、独立以前から第二次5ヵ年計画が始まったばかりの60〜70年代シンガポールの言語状況を反映した研究であり、各民族の母語の影響が大きく残った複数の英語変種の存在が前提となっている。その後、民族の棲み分けが少なくなり、民族英語変種の接触が密になっていった結果、シンガポール人に共通して英語変種間の使い分けが見られるようになり、この状況を説明する新しい枠組みが必要となってきていた。

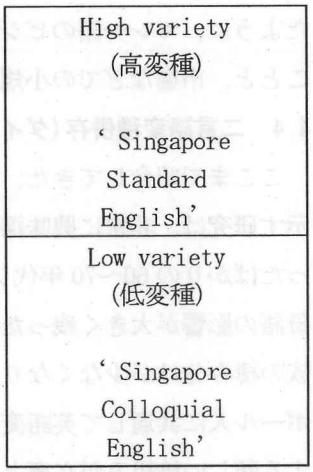
1980年以来の能力別言語教育を受けてきた子供が大学を卒業する時期を迎え、90年代初頭から、シンガポール社会が「二言語変種併存(Ferguson, 1959)」(注3参照)に似た状況にあるとする報告が見られるようになった(Gupta, 1991;大原, 1995)。「二言語変種併存」とは、公的度合いの高低と関わる領域によって、同一言語の社会的機能が異なる二変種(高変種と低変種)が使い分けられる社会の様相を「二言語変種が併存する」として述べたものである。4.2, 4.3 で触れた「多言語変種併存(Platt, 1977, 1980)」は、この概念を拡大して複数言語に適用したものである。

1989, 1991年の時点で、グプタはシンガポールが古典的クレオール社会ではないことを踏まえて、「ポスト・クレオール連続体」の概念を否定し、さらに、プラットが提唱した「多言語変種併存」を強く批判[7]した上で、「二言語変種併存」に似た状況、つまり「二言語変種併存的(diglossic)」という慎重な表現で説明した。「標準的なシンガポール英語」と「口語で使われるシンガポール英語」の英語変種の存

在と使い分けを示したのである。

「二言語変種併存」社会の特徴に、高変種は教育、宗教など公的な領域で習得され、低変種は幼児期に家庭など非公的な領域で習得される点がある。「標準的なシンガポール英語」の習得は言語教育政策の浸透により、客観的に証明されるが、子供が低変種、つまり「口語で使われるシンガポール英語」を家庭など非公的領域で習得することを立証する必要があった。そこで、グプタは異なる民族間の子供同士の談話を分析し、共通する言語特徴の出現割合など子供の言語習得のデータを用いて、

第5図
複合ダイグロシア
(大原, 1993, 2002)




第6図
ダイグロシア
(Gupta, 1991, 1994)

「二言語変種併存的」な状態だと述べたのである。

しかし、まだ、その子供たちが成人して完全な結果を得られていないことと、調査データから、大原(1995, 2002)は、二言語変種併存的な状況を踏まえた上で、高変種と低変種以外に中間言語的な段階の「擬似高変種(forthcoming high variety)」を認め、高変種と擬似高変種の使い分けのグループと、擬似高変種と低変種の使い分けのグループの、二つのパターンを組み合わせた分布構造を想定した。それが、図5の「複合ダイグロシア」モデルである。ここでいう「擬似高変種」は、いずれ高変種になると仮定するものである。第二言語習得の際に見られる中間言語にも似

た変種で、標準を目標にしているため高変種に近いが、統語、音韻において多少の異なりを見せる。標準英語の動詞、名詞を用いる一方で、語用論的な文章末の小詞(la, ma などの sentence final particles)の使用、BE 動詞の脱落があるが、話者に公的な領域で高変種として使用している意識の下で現れる特徴を持つ変種を基準とした。

その後、グプタ(1994)は図6のように、公的領域で用いられる「標準シンガポール英語(Singapore standard English)」を高変種とし、非公的な領域、非標準的に使用される「口語シンガポール英語(Singapore colloquial English)」を低変種として、それぞれの文法的特徴を明らかにしながら、社会に機能の異なる二変種が存在することを認め、使い分けが見られる「二言語変種併存」社会としてシンガポール社会の英語変種の分布を説明した。

この「標準シンガポール英語」とは、英国標準英語と異なる特徴を持つシンガポール英語の標準形としており、シンガポール英語を自律的な一つの言語として捉える視点に基づいている。また、現在、一般にシングリッシュとして理解されている変種は、この低変種の「口語シンガポール英語」であるとしている。現在、「口語シンガポール英語」では、各民族言語の特徴を持つ英語変種の接触が密になり、「二言語変種併存」の様相をますます強めて折り、この枠組みは多くの研究者に指示されるようになっている。

## 5. まとめ

シンガポールの英語に関する研究は、標準英語の一地域変種として、語彙、統語、音韻の地域特性の記述が独立直後から盛んに行われてきた。「ポスト・クレオール連続体」はその地域で維持されることが多いが、現在のシンガポール英語が「二言語変種併存」、つまり一言語の二つの変種が他律的関係にあり、社会的機能をもって使い分けられている状況にあるということは、安定した言語構造を持った一言語であるといえる。2004年8月の建国記念日の首相の演説で、中国語教育に向けて、Chinese Language Curriculum and Pedagogy Review Committee(CLCPRC)、中国語教育検討委員会とも言うべき機関の設立が発表された。これは、華人間の共通語の認識と公用語の習得を目指した‘Speak Mandarin Campaign’とは性質が異なり、今、中国本土とのコミュニケーションを図るために、外国語としての中国語の「話す・聞く能力」

を身につける学校教育に向けての準備である(大原, 2004a)。「ポスト独立世代」と呼ばれる英語教育を受けたシンガポール人とその子弟にとって、英語が母語となっている傍証となるだろう。

「ポスト・クレオール連続体」から「二言語変種併存」社会へ向かう変化の法則があるわけではない。むしろ「ポスト・クレオール連続体」は安定することが多い。しかしながら、4. で概観したように、シンガポールでわずか40年余りの間に言語変種の分布に推移が起こり得たのである。これは言語自身の変化に向かう力だけによるものではない。言語政策、教育政策が大きく方向付けたといえる。

独立時に、民族の母語ではない英語を公用語に制定し、地位付けを行う形で英語と母語の二言語教育が行われた。政府も人々も期待していた英語使用の対外的効果を実感し、国内的機能を認識するようになって英語中心教育へと進み、1980年以降、明確な英語中心の言語教育政策が一貫して進められてきた。その結果、シンガポール社会は、ファーガソンが提示した４つの「二言語変種併存」社会の中では、スイスのドイツ語圏の「標準ドイツ語」と「スイス・ドイツ語」の様相に似てきたといえる。「標準シンガポール英語」は、英語に公用語の地位が与えられ、学校教育で標準英語教育がされる結果、安定した高変種となり、母語の特徴を持つ「口語シンガポール英語」英語は、他の英語圏においてシンガポール人のアイデンティティを示す機能や、シンガポール人の間で親しみや連帯感を強める機能(大原, 2004b)をも合わせ持つようになったのである。

一般に、言語変化の研究を国家という限られた単位で捉えることは少ない。国家の境界を越えた地域、もしくは国家内の一社会という視点を持たなければ、効果を発しないからである。しかし、シンガポールでは、国家という単位での研究が成果を上げるだろう。これは、シンガポールが国家であると同時に、言語学的にはひとつのことば社会であるため、国家レベルで施行される言語教育政策と社会レベルでの言語変化の関係を併行して追うことを可能にしてくれるからである。シンガポールに見られる言語変化の速さと幅の大きさは、言語教育政策という大きな変数と、それが機能しうる国家＝社会という条件を備えていたといえる。

本稿では、言語変化と言語教育政策を関連させて概観したが、言語教育制度の転換期を視野に入れることで、「シンガポール英語」がどのような言語であるかを知る助けになったと考える。同時に、シンガポールの英語の地位、機能の変化や他の言語社会には見られない言語変化の速さといった現象に、変数として働く言語教育政

策の姿が、浮かび上がってきたといえるであろう。

注

1) マレーシアの英語変種の状況は、「ポスト・クレオール連続体」に近い状態にある(Gill, 2002) という。

2) 親しみ、丁寧さを表現するために、スタイルの切り替えとして隣り合う変種を使うことが観察されているが、何らかの機能を持って使い分けるコードの切り替えはない(Bickerton, 1973; Platt, 1977)。

3) 二言語変種併存(ダイグロシア)社会のモデルとして、アラビア語圏、ギリシャ、ハイチ、スイスのドイツ語圏の4つの社会を上げた(Ferguson, 1959)。アラビア語圏は、高変種が古典アラビア語で低変種が地方の口語アラビア語、ギリシャは、カサレヴサという純正ギリシャ語(高変種)とディモティキという大衆ギリシャ語(低変種)に、ハイチは、フランス語(高変種)とハイチ・クレオール(低変種)、スイスのドイツ語圏は、標準ドイツ語(高変種)とスイスドイツ語(低変種)とした。二言語変種併存については、4.4も参照されたい。

4) 「シンガポール英語」は、英語でもSingapore Englishであり、American English, Australian Englishのように Singaporean Englishという形式は一般に用いられない。国家名が英語につくことから、「国家が作った英語であることが色濃い」とする見方もあるが、研究の流れの中で用いられ、音節の上でも安定しているので自然に使用されたに過ぎないと考えられる。実際に、これを意識して、Singaporean Englishを使った研究者もいるが、定着していない。

5)6) 言語レパートリー(verbal repertoire)は、どの言語を母語とするか、どの言語教育を受けてきたかによって個人が持ちうることばのことで、一般に、バイリンガル、マルチリンガルといわれるのがこれである。スピーチレパートリー(speech repertoire)というのは、特定のことば共同体で有効に、機能的(公的、非公的など)に使われている言語や変種のレパートリーである。共同体のメンバー全員が必ずしもそれらすべての言語、変種を使えるわけではない。図3は、中華系シンガポール人のスピーチレパートリーとあるが、これは中華系個人の能力を指すものではなく、中華系社会で使用されうる言語、変種のすべてを示したものであることが分かる。他の多言語国家(社会)と異なり、シンガポールの場合は、言語レパートリーとスピーチレパートリーが重なり合う部分があるので複雑である。

7) ファーガソンの提唱した「二言語変種併存」は一言語の変種間に適用すべき概念であるのに、他の言語を含めて示すのは、フィッシュマン(Fishman, 1971)がパラグアイの状況を、高変種にスペイン語を、低変種にグアラニ語と異言語を当てて「二言語変種併存」だと説明して犯した過ちと同じであり、「多言語変種併存」の枠組みを用いれば、世界中の多言語社会を説明できることになるとプラットを批判した。

**参考文献**


Bickerton, D. (1973) "The nature of creole continuum". *Language 49*.

Ferguson, C. A. (1959) "Diglossia". *Word 15*.

— (1977) "Sociolinguistic setting of language planning". In Rubin, J., Jernudd, H., Gupta, J. D., Fishman, J. A. and Ferguson, C. A. (eds.), *Language planning process.*. Berlin: Mouton.

Fishman, J. A. (1971) *Sociolinguistics: a brief introduction*. Rowly: Newbury House.

Gill, S. K. (2002) *International communication: English language challenges Malaysia.* Malaysia: Universiti Putra Malaysian Press.

Gupta, A. F. (1989) "Singapore colloquial English and Singapore standard English" *Singapore Journal of Education 10.*

— (1991) "Acquisition of diglossia in Singapore English". In Kwan-Terry, A. (ed..), *Child language development in Singapore and Malaysia*. Singapore: Singapore University Press.

— (1994)*The step-tongue: children's English in Singapore.* Multilingual Matters: 101.Haugen, E. (1966) "Linguistics and language planning". In Bright, W. (ed.), *Sociolinguistics* The Hague: Mouton.

Neustupný, J. V. (1994) "Problems of English contact discourse and language planning". In Kandiah, T and Kwan-Terry, J. (eds.), *English language planning: a southeast Asian contribution*. Singapore: Times Academic Press.

大原始子 (1995)「シンガポールの言語政策下における Forth-High-variety 概念の認定に向けて」『第3回社会言語学研究会予稿集』.

— (2002)『シンガポールの言葉と社会 改訂版』東京：三元社.

— (2004a) 「二代目リー」，月刊『言語』2005年1月号，Vol.34・No.1.

— (2004b) 「アイデンティティの多層性と言語の選択・切り替え」、『ことばとアイデンティティ』東京：三元社.

Platt, J. T. (1975) "The Singapore English speech continuum and its basilect 'Singlish' as a creoloid". *Anthropological Linguistics 17.*

— (1977)"A model of polyglossia and bilingualism: with special reference to Singapore and Malaysia". *Language and Society 63*

— (1980)"Multilingualism, Polyglossia, and code selection". In Afendras, E. A and Kuo, E. C. (eds.) *Language and society in Singapore*. Singapore: Singapore University Press.

Rubin, J. and Jernudd, B. H. (1971) "Language planning as an element in modernization". In Rubin, J. and Jernudd, B. H. (eds.), *Can language be planned?* Holulu: University of Hawaii Press.

Tay, M. (1979) "The uses, users, and features of English in Singapore". In Richard, J. C. (ed.), *New varieties of English: issues and approaches.* Singapore: SEAMEO Regional Language Center.

— (1986) "Lects and institutionalized varieties of English: The case of Singapore". *IDEAL*, 1.

**参考資料**

PM Lee Hsien Loong's National Day Rally Speech , *The Straits Times*, Aug 22, 2004

(桃山学院大学)